

応用言語学特講 第5章前半部分(1節・2節)

担当：S.K.

1. バイリンガルとは誰か？

(1) バイリンガルの定義

Bloomfield(1935)の「2言語をネイティブスピーカーのように操れる人」という「完璧なバイリンガル」の定義を1つの極とし、Diebold(1964)のように、「第二言語を習得し始めた段階の話者」を含む定義を他方の極として、その間に位置する様々なレベルの言語能力の持ち主を任意にバイリンガルであると定義することは可能である。しかし、その時、基準となるモノリンガルのネイティブスピーカーの言語能力はどこに求めればよいのだろうかという問題がある。

また、「言語知識の総和」という次元でのみバイリンガルを定義することの問題点も、多くの研究者によって指摘されている(Romaine, 1999; Hamers & Blanc, 2000; Grosjean, 1985)。「日常生活に関する表現が豊富な言語」と「学業や職業上で必要な言語能力が豊富な言語」というふうに、違った生活領域(domain)をそれぞれの言語で処理する(が他の領域のことは処理できない)という人が、世界には非常に多い。言語能力という次元でのみ考慮するのではなく、複数の言語を、それぞれの機能を果たすために日常的に使っているかどうかという「言語使用」の次元(Mohanty(1994)のいう social-communicative dimension)が、バイリンガルの定義には必要になってくる。

Romaine(1999)は、言語の「棲み分け」があるからこそ、マイノリティ言語が、経済的、政治的、社会的にも弱いにもかかわらず、完全に淘汰されずに残り得るのであるという指摘をしている。

この章では、「バイリンガルとは、2言語を日常的に何らかの機能を果たすために使う人」であるという Romaine(1995)の広義の定義にとどめる。ここで重要なのは、バイリンガルがバイリンガルである(また、あり続ける)のは、基本的に、重複しない言語使用域でそれぞれの言語を使用する必要があるからだということと、2言語併用者のバイリンガル度を規定しようとする時には複数の次元で測ることが必要だということを理解することである。

(2) バイリンガルのカテゴリー

バイリンガルを類型に分類する方法は多い(Baetens Beardsmore, 1982等)。ここでは、バイリンガリズム関連の文献に頻出し、かつ、この章の中で取り扱う概念と関わりの深いカテゴリーを取り上げる。

まず、1番目は、2つの言語の能力と言語間の均衡度を基準に分類したカテゴリーである。2言語が同じ生活領域で使われ全く同一の言語能力を持っているバイリンガルという意味の「均衡バイリンガル」は少なく、どちらかが強い(dominant)「偏重バイリンガル」が自然である。

2番目の分類は、バイリンガルの脳の中で、2つの言語がどのような意味体系をもっているかによって分類される。2つの言語が同じ意味体系をもっている場合は「複合バイリンガル」、違った意味体系をもっている場合は「等位バイリンガル」となる(Erbin & Osgood, 1954)。このような差は2言語にふれた状況や年齢などの要因によって生じることが多い。

3番目に、言語習得のタイミングによる分類が考えられる。生後すぐに2言語にふれ、それらを同時に習得する「(早期)同時バイリンガル」に対し、「多少の時期のずれ」がある「継続バイリンガル」という分類である。

最後に、2つの言語が両方とも、社会的、経済的、政治的な地位が高く、「価値付与(valorization)」(Hamers & Blanc, 2000)がなされた言語であるとみなされていれば、その組み合わせは「付加的バイリンガリズム」を生む。逆に、どちらかの言語が非常に価値の低い言語とあるとみなされている場合には、たとえその言語が母語であり、家族を結ぶ唯一の絆であったり、文化的アイデンティティのよりどころになるべき言語であっても、それを捨て去り、価値の高い第二言語を母語と置き換えようとする「消滅的バイリンガリズム」現象がおこる。バイリンガリズム現象は、社会的な要因が決定的な影響を与え得る。

類似の分類にエリートバイリンガリズム(elite bilingualism)と大衆バイリンガリズム(folk bilingualism)というもの(Romaine, 1999)もあり、前者は本人や家族の意志で2言語を学んだバイリンガルを指し、後者は生きるために余地なく複数の言語を学ばざるを得なかった人々を指す。

2. 早期同時バイリンガルの言語習得

(1)「単一言語システム」対「二言語システム」

早期同時バイリンガルの言語習得の研究は、1990年代にめざましく発展した。それまでに主張されていた、2言語が1つの言語システムの中に統合されている(単一言語システム: one-language system)時期を経て、その後区別がおこるという立場(Leopold, 1939-45; Saunders, 1988; Volterra & Taeschner, 1978)に対して、2言語は最初から言語システムとして区別されている(二言語システム: two-language system)という主張が拮抗し、早期同時バイリンガルの言語習得の中でも最も重要な研究課題の1つとして検証された。

2000年以降にこのテーマについての議論を集約した論考(Deuchar & Quay, 2000; McWhinney, 2001; Meisel, 2001)によると、子どもは非常に早い時期から2言語の区別をしているという見方が圧倒的に優勢である。

(2)複数言語の認識

言語を産出することがまだ不可能な乳児が複数の言語を認識できるかどうかを調べた研究(Bosch & Sebastian-Galles, 2001)は、2言語を聞いて育っている赤ちゃんが生後4・5か月でその2言語を区別できたとしている。言語が切り替わったことに対する乳児の反応から、2言語間にある母音の種類や配列などの特徴によって2言語を区別したと報告されている。

る。

ここまで早い幼児期の研究はまだ多くはなく、今後の検証に待つべき部分はあるが、これらの研究は、人間の子どもが非常に高い言語識別能力を備えている可能性を示唆している。子どもは、言語の区別を、話者や状況のみならず、言語の音韻上の特色など言語そのものを手がかりにして行っているのではないかと考えられるのである。

(3)音素の産出の区別

2つの言語間（スペイン語と英語）で発声特徴が違う有声音—無声音の対比に着目し、この音の対比が、どちらの言語の成人の対比に近いかを調べた(Deuchar & Quay, 2000)。有声音—無声音の対比が人間の耳に違いとして聞こえるための有聲開始時間（voice onset time、以後 VOT と呼ぶ）は言語によって違う。Deuchar & Quay の被験者 M は、有聲—無声の区別が現れ始めた 2 歳 3 か月では、英語ではほぼ大人の VOT のコントラストで産出し、スペイン語では、大人のそれには及ばないが、英語の VOT よりもはるかに短い VOT を示し、2 言語を区別して産出していることが確認された。

(4)形態素・語彙・シンタクスの区別

発表された数多くの研究で、子どもが、それぞれの言語固有の形態素・語彙・シンタクスを産出し始める時から、2 言語を区別して用いていると結論づけている。1つの概念を表す語彙をどちらの言語でも知っている場合には、話す相手や会話の場所、状況に応じて使い分けができており、こういう使い分けができていない時には、2 言語のうちの 1つの言語でしかその単語を知らないことが理由であることが確認された。

(5)独自発達か相互依存発達か？

2 言語は全く独自に発展する(autonomous development)のか、それとも何らかの転移(transfer)、促進(acceleration)、遅滞(delay) (Paradis & Genesee, 1997)といった影響を与えあいながら習得されていくのか(interdependent development)についてまだ研究が少なく、この点に関して研究者の合意があるとは言えない。

(6)言語環境の重要性

モノリンガル同様、バイリンガルの言語習得には、周りの大人のインプットが大きく影響するので、このような「構築主義」的、「言語による社会化」(language socialization)的な視点が最近特に重要視されている。早期同時バイリンガルのコードスイッチング(code-switching、言語切り替え)の問題を緻密なデータで検証すると、子どもの言語の区別／切り替えは、周りの大人の言語コードスイッチングのパターンや、子どものコードスイッチングに対する時に、大人がどのようなストラテジーを使うかによって影響されることが分かってきた(De Houwer, 1995; Lanza, 1997, 2001)。Lanza(2001)は、子どもの言語コ

ードスイッチングに対して親は 5 つのストラテジー(minimal grasp, expressed guess, repetition, move-on, code-switching)のうちのどれかを使って対応するという。地域や家庭で大人自身が積極的に言語を切り替えることが多い大衆バイリンガル環境で育った子どもが、頻繁にコードスイッチングをするようになるのは自然な結果であると言える。

基本問題

- (1) モノリンガルの完璧な能力を 2 セット備えているということは、相当難しいことである。英語を話すことができる日本人でも、日本語と同じくらい英語を話せる日本人はほとんどおらず、完璧なものを 2 セット備えている人はいないに等しい。そのため、完璧なものを 2 セット備えている人と定義すると、バイリンガルやバイリンガリズム現象を説明できなくなってしまう。バイリンガルの定義には、複数の言語を、それぞれの機能を果たすために日常的に使っているかどうかを考えることが必要になってくる。

考察

『バイリンガルとして育つということ—二言語で生きることで起きる認知的影響—』(久津木、2014)で次のようなことが述べられていた。

二つの言語を聞きながら育つことで、バイリンガルの子どもは両言語で同じ意味をもつ単語を知ることになる。Translation equivalent(TE)(DeHouwer, 2009)と呼ばれるこの種の語彙はバイリンガルの語彙の多くを占める。同時バイリンガルの子どもが、ある特定の種類の語彙だけは日本語でしか言わない状態や、ある特定の語だけは英語でしか言わない状態、等はよくあることである。この現象には大きく二つの要因が考えられる。二言語を同時に聞いて育ったとしても、各言語が使われるのを聞く場面が限定されている、すなわち、入力の変りがまず考えられる要因の一つであり、もう一つは、大人の感覚で TE とされているものは、実は子どもにとっては異なるものを指すと理解されている可能性である。

大人の感覚で TE とされているものが、実は子どもにとっては異なるものを指すと理解されている可能性があるということは、興味深い要因だと思った。子どもが、大人の感覚とは異なる感覚で理解していたときに、その言語使用に対して大人がどのように反応するかによって、それぞれの言語の語彙の量も変わるのではないかと思った。インプットの量だけではなく、周囲の大人の反応も、同時バイリンガルの子どもに重要な影響を与えているのだと思った。

3. 継続バイリンガルの言語習得

(1) 継続バイリンガルの研究

幼児期や学童期に第二言語を学び始める継続バイリンガル(*consecutive bilinguals*)の言語習得は第一言語の習得とは異なるという指摘(Hamers&Blanc,2000)

- 継続バイリンガルの大きな人口を形成しているマイノリティ(*indigenous minorities*)や移民の子どもの言語と学校生活での問題、認知面での発達に焦点が当てられている。
- 1960年代から始まったイマージョン教育をうける子どもについても研究が盛ん。
- 言語習得は子どもと周りの大人との間の関わりが大きく関与するプロセス。子どもの言語習得には養育者(母)、子どもの属する家族が持つソーシャルネットワークの言語変種、言語使用、価値観が影響をうける。

(2) マイノリティや移民の子どものバイリンガリズム

早期同時バイリンガルの言語習得にみられるプロセスとは違った一定の共通した傾向

- 「会話言語能力(*conversational language proficiency*)」は1年から2年で身につくが「学業用言語能力(*academic language proficiency*)」が年齢相応の能力にまで到達するには5年から9年という長い時間が必要でそのような第二言語能力を身につけられないままになる場合も大いにあるということ。

母語の社会的地位は低くて地域社会や学校などがその母語を育てる体制を持ち合わせてない場合、家族にもその経済的、教育的な力がない場合には消滅的バイリンガリズムが生じてしまう。

(3) イマージョン教育の言語習得

イマージョン教育…母語ではない言語を教授言語にすることによってその第二言語を習得させかつモノリンガルと同様の教科内容を教えようとする教育のこと。

Hamers&Blanc(2000)の研究

フランス語イマージョン教育の研究において、その中で育った子どもには以下の傾向がみられる。

- (1) 長期的に見れば母語に遅れはない。
- (2) 第二言語の能力は伝統的な外国語としてのフランス語教育をうけた子どもよりはるかに高い能力が身につく。

始める時期や第二言語を使う割合によって早期トータルイマージョン、パーシャルイマージョン、後期トータルイマージョンの種類がある。第二言語の伸びについてはパーシャルイマージョンが他と少し劣る。しかしトータルイマージョンのほうもモノリンガルの能力には及ばず産出面ではノンネイティブとしてのエラーが残り形態素、シンタクス、語用論上に問題がある。

●日本における私立加藤学園の英語イマージョンと朝鮮イマージョンの報告

加藤学園イマージョン教育

イマージョンプログラムの生徒は加藤学園内の同学年の日本語プログラムの生徒と同等の数学、国語の能力を示し非常に高い英語力を育てている。

朝鮮学校でのイマージョン教育

日本語への言語シフトが完了した3～5世の子どもたちに第二言語である朝鮮語を教えるイマージョン教育を実施。

4. バイリンガルの特色

(1) バイリンガルの言語能力の可変性

- バイリンガルの2言語の能力が全く同じ領域をカバーし同じレベルを持つことはまれである。さらに2言語能力はバイリンガルの成長とともに非常にあわただしく急激な変化を受けることが多い。
- 乳児期から社会性の芽生える幼児期になると出会う友達が使う言語を子どもは好むようになる。家族の持つソーシャルネットワークや学校での使用言語が子どものアイデンティティ形成と相互に作用しながら2言語の重要性や使用頻度を決定し、ひいては2言語の能力(及び領域)を決定する。

ある程度まで育っていた言語が使用頻度が減ることで絶対的にあるいはもう一つの言語と比べて相対的に弱くなる過程は言語のダイナミズムを「負」の部分から物語っている。

(3) コードスイッチング

コードスイッチング…二つかそれ以上の言語を同じ談話(discourse)の中で使うこと」(Myers-Scotton&Jake 1995)

●コードスイッチング現象を研究対象にする価値について

- ① バイリンガルにとってどのような社会的、語用論的意味を持つものであるか
バイリンガルは強調、引用、トピックのスイッチ、聞き手との一体感の確認、

その言語を知らない聞き手の排除他、様々な機能のためにあえて言語を切り替えるというストラテジーを使う場合がある。

② 心理言語学的なアプローチ

一つの文章の中で 2 言語の交代が起こる(intra-sentential code-switching)時に何らかの規則にのっとって切り替えられるのではないか、切り替えの仕方はバイリンガルの 2 言語の能力とどう関わるのかという問題を追及する。

言語習得とコードスイッチングの関係

早期同時バイリンガルのごく初期に見られたような「言語能力に欠けるから 2 言語を切り替える」といった説明は年齢が高くなるとあまり一般性を持たない。

③ この現象を分析することで脳の中の言語知識がどのような言語処理を経て言語産出に至るのかという言語産出モデルへの示唆を得ることが目標。

【練習問題】

- (2) かつて早期から 2 言語に触れさせることは子どもに害があると考えられていたのはどのような根拠にもとづいていたのか？
- A. 幼児期から複数の言語を習得することが人間の脳にとって十分可能なのか、また乳幼児期には母語を一つにしぼっておくのが子どもの言語発達には望ましいのではないかという見方があったため。

【訂正】

かつては単一言語システムの味方が主流であった。このシステムは 2 つの言語が一つの言語システムの中に構築されているという考え方であり、これによって 2 言語を学ぶと混乱が生じてしまい母語と外国語を中途半端に取得することになるという見方があった。しかしのちに 2 言語は最初から区別されているという二言語システムの見方が出てきて、研究でもこのことが証明された。したがって現在では子どもは非常に早い段階から 2 言語を区別しているという見解が圧倒的に優勢となった。

【加藤学園のイマージョン教育について】

目標

- 1.機能的な英語能力を習得し、英語での授業を受けることができる。
- 2.日本語能力も、一般学生あるいはそれ以上の水準に到達し向上を目指す。
- 3.各教科の内容を確実に理解する。
- 4.日本人としてのアイデンティティーを確立しながら、他国の言語や文化を尊重し理解する。
- 5.自他を尊重し、創造力を伸ばして誠実に実践する。

加藤学園は、1992年4月、日本で初の英語イマージョン教育を導入した。1994年には加藤学園幼稚園（3歳から5歳児）で、1998年には加藤学園高等学校・中学校にもイマージョンプログラムを導入しました。暁秀高等・中学校では、幼稚園・初等学校の英語イマージョンプログラムから継続しているこのプログラムを、“バイリンガル・プログラム”と呼ぶ。2000年11月、加藤学園のイマージョン・プログラムは、日本の教育への実績と貢献が認められ、大学英語教育学会(JACET)から大学英語教育学会賞特別賞を受賞した。

●なぜ二か国語システムが効果的なのか？

さまざまな教育の場で外国語習得に関する調査が数多く実施されている。過去30年間イマージョンプログラムの成功が主な要因となり、言語のみを習得する教授法から、言語と一般教科を統合して教えていく教授法へと移りつつあります。この変動は、以下4つの原理がもとになっている。

- 1.実践的な状況で学ぶことで、言語を最も効果的に習得することができる。言語習得経験の浅い子供たちのために、カリキュラムは、自然に外国語が習得できる環境、そして、子供たちが知っていること、興味のあることや、自分の感情や意見を伝える機会を与える環境を与えるように作られている。
- 2.新しい言語を学ぶには、動機づけが必要。そのためには、興味深い授業内容を用いることが不可欠。授業内容が子供たちにとって意味のないものであれば、言語を学ぶことに興味を示さない。
- 3.3. 子供たちは、母国語、批評的思考力、そして、社会の一員としてのルールを同時に身に付けていく。それに加えて、外国語の学習を兼ね備えた教科内容指導の方法を導入することで、第二言語力も同時に身に付ける。
- 4.目的に応じて、使用する言語が異なる。初等学校で実践されている言語の学習と兼ね備えた教科内容の指導方法は、多様な場に対応できる外国語を習得する機会を与え、自然に外

国語を身に付けていく。

●イマージョン校の掲げる目標

- 1.機能的な外国語力を習得すること（聞く・話す・読む・書く）
- 2.一般学生と同じレベルの十分な母国語能力を習得すること。
- 3.各教科の授業内容を理解し、必要な力を習得すること。
- 4.他国の文化を理解し尊重すること。

●加藤学園イマージョンプログラムの特徴

- 1.イマージョンプログラムは、学習指導要領のカリキュラムに沿っている。加藤学園の児童・生徒は、レギュラープログラム"イマージョンプログラムを導入していないプログラム"と同様のカリキュラム（数学・理科、社会科、体育など）を使用している。
- 2.イマージョンプログラムでは、外国語で学習した授業内容を児童・生徒の母国語で教え直すことはしない。加藤学園では、日本語教師が単元で学習した重要用語の復習や日本語で実施される学年末テストの手助けをする授業時間を組み込んでいる。外国人教師によって教えられた教材は、日本語では学習しない。
- 3.文化は、地域文化を反映。インターナショナルスクールとは違い、児童・生徒に西洋的価値観を無理強いすることはない。外国人教師が、"新しい文化"に適応することを求めている。